様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　21 年　6 月　2 日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2006 年度～2008 年度
課題番号：18530105
研究課題名（和文）　グローバル時代のナショナリティに関する規範理論的な国際比較研究

研究課題名（英文）　A Comparative Study of Nationalities in the Age of Globalization: From Normative Perspectives

研究代表者
富沢　克　（同志社大学・法学部・教授）
研究者番号　60121597

研究成果の概要：
本研究会では、国際比較の観点から欧米・アジア・日本におけるナショナリズムの起源およびその発展の諸形態を検討した。そのさい、議論の柱にしたのは近年新たに注目されている「リベラル・ナショナリズム」という論点である。今回の議論を通して、「デモクラシーとナショナリズム」という古くて新しい問題をグローバル化という現代的状況のもとで再考することができた。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2006 年度	1,400,000	0	1,400,000
2007 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2008 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総　計	3,500,000	630,000	4,130,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：政治学
キーワード：ナショナリティ、ナショナリズム、ナショナル・アイデンティティ、グローバル化、移民、規範理論、国際比較

１．研究開始当初の背景

従来、政治学においてナショナリズムの問題は必ずしも十分に議論されてこなかった。しかし冷戦終結以後の状況を考えれば、この問題は避けて通ることのできない現代的課題である。歴史社会学的な知見をふまえつつも、規範的な観点からナショナリズム問題に取り組むことが自由民主主義にとって喫緊の課題であるとの考えからこの研究会を組織した。

２．研究の目的

グローバル化の進展のなかで国民国家やナショナリズムは重要性を失っていくという一部の見方に対して、むしろそれらの「変容」こそが現代を特徴づけているのではないか。このような共通の問題関心からそれぞれのフィールドから「グローバル化のなかのナショナリティ」という問題にアプローチすることを当初の研究目的とした。

３．研究の方法

研究会のメンバーの本来のフィールドはさまざまであるが、「デモクラシーとナショナリズム」という問題、すなわち「リベラル・ナショナリズム」論を主要な軸とし、その多様性、現代的可能性、問題点などを各論的な観点から掘り下げて検討することを目指した。

４．研究成果

内外の状況を見ても「リベラル・ナショナリズム」をめぐる議論はいまだ決着がついていない問題であるが、3 年間の研究会を通してひととおり問題点は出尽くしたものと考える。以下、研究分担者ごとにそれぞれの成果をまとめる。(富沢)

(1)　この三年間では、近代日本のナショナリティ論について、包括的にみるとどのような問題群が存在するのか、またその諸課題を解明するのに必要な個別的なテーマを選択して検討するという見通しの下に研究を進めてきた。

前者の課題については、まず「ナショナリティ」概念をどのように理解するかについて、政治的・法的・社会的・文化的概念に分類をして検討した後、近代日本のナショナリティ論に関する諸課題を歴史社会学や思想史的観点から分析しているこれまでの研究史の整理を試みた。

後者の個別テーマに関しては、大正期から昭和前期にかけて植民政策論の分野で著名な業績を残した矢内原忠雄の「民族」論に焦点を合わせて分析した。矢内原忠雄の「民族」論については、まず彼の「民族」概念を「人種」・「国民」などと対比しながら区分けし、「民族」概念の自然的要素と歴史的要素を明確化した。そして彼の「民族」概念について、矢内原の思想的特徴をなす「国家の理想」（社会的正義と国際正義）との関連、「民族と平和」という独特の捉え方、「民族」論の植民政策学における位置、さらには帝国日本の民族精神やナチス・ドイツの民族論との対比などについて検討を加えた。矢内原の「民族」論に関する以上のような分析は、より精査して近く論文にまとめたいと考えている。（出原）

(2)　首都ベルリンを中心として、統一ドイツの建築物やモニュメントの建立状況を分析し、都市の記憶と意味構造を明らかにした。近代ドイツの都市空間(とりわけ広場などの公共空間)は、内的自然と同様に外的自然を制御し、いわば「文明化された」空間として認識されてきた。

第二次大戦後ドイツや統一ドイツにおいて、人々は自分たちを文明化された国民として再認識し、自己のアイデンティティを確立した。とりわけ、ドイツ人が加害者となったナチスの犯罪に関して都市の中に記憶に留めるべきかをめぐってドイツ人のアイデンティティは激しく揺れ動いた。また第２次大戦後に東欧・旧ソ連から強制移住させられたドイツ人移民たちの慰霊碑では、逆に被害者としてのドイツ人という自己アイデンティティが噴出していた。

結論的には、一方でこんにちでも古典的近代の風景を再生しようとする方向が継続しているとともに、他方でそれから距離を取ろうとする建築および建築をめぐる議論も多くあること、さらには近代ドイツやナチズムの生み出した負の側面そのものを都市の風景に取り入れようという方向もあること、などの大きく三つの点を示した。(城)

(3)　ナショナリズム論の分析を進めるに当たり、その対象として検討したのは、京都学派と総称される西田幾多郎とその門下生たちである。彼らは、哲学者として絶対的なるもの、普遍的なるものに強い関心を有す一方で、日本的なるものに深い関心を有し、さらには、昭和戦前期の日本政治への直接的な働きかけも行なった。戦争に協力し、日本を偏愛するという非難を昭和戦後期以降に受け、絶対的なるもの、普遍的なるものに執着し日本を損なうとの非難を昭和戦後期に受けた彼らには、たしかに、その両面を兼ね具える点があったのである。

この京都学派の両面性について、日本比較政治学会報告においては「思想と制度」の視点から、日本思想史学会報告においては「二十世紀思想史」の視点から考察し、特に西田門下の高坂正顕について、「民族の哲学とは何だったのか―高坂正顕の挑戦」（『産大法学』2009 年度掲載予定）と題する論考を作成した。ちなみに、高坂のナショナリズム論は、「民族の哲学」として提示され、一方ではネイションの哲学的意義が強調されるとともに、他方ではナショナリズムに対する哲学の指導性が主張されるものであり、これは京都学派のナショナリズム論の代表と言うべきものである。それがはたして、現代のリベラル・ナショナリズム論の先駆的形態であったかどうかは、本共同研究全体への研究分担者からの問題提起であり、かつ、研究分担者自身の今後の課題でもある。(植村)

(4)　「ナショナリズム論とコスモポリタニズム論の比較検討」というテーマの下、研究を行った。ナショナリズムやコスモポリタニズム、多文化主義に関する現代の政治理論を

精査しつつ、リベラル・デモクラシーの諸理念（自由、平等、民主主義など）と、ナショナリティや国民国家体制との理論的関係性の検討を行い、ナショナリティの規範的分析の枠組み作りを試みることが目標であった。

具体的には、大別して、以下の四点について研究活動を進めた。①90 年代以降、英米圏で活発に議論されてきている「リベラル・ナショナリズム」の政治理論を日本に紹介すること、②「リベラル・ナショナリズム」の理論を参考にしつつ、リベラル・デモクラシーの諸理念とナショナリティとの関係性を吟味すること、③コスモポリタニズムや多文化主義の理論と、「リベラル・ナショナリズム」の理論とを比較し、リベラル・デモクラシーの理念にかなう国際政治秩序のあり方を考察すること、④主に、「人権」や「自律性」という観点から、日本や東アジアにおけるリベラルなナショナリティの可能性を検討すること。上記の研究成果については、デイヴィッド・ミラー／富沢・長谷川・施・竹島訳『ナショナリティについて』風行社、2007 年、「リベラル・デモクラシーとナショナリティ」（施・黒宮編『ナショナリズムの政治学』ナカニシヤ出版、2009 年、所収）などに示している。(施)

(5) カール・シュミットやエルンスト・ユンガーの政治理論・政治思想を中心に、ドイツにおける「失われた世代」のナショナリズムの研究を進めるというのが、本研究グループにおいて当初から与えられた役割であった。もともと「失われた世代」という言葉は、狭くは第一次世界大戦後のアメリカで活躍し、もはや既成の価値観に確たる信頼を持てなくなった文学青年たちのことを指す。しかし、むしろ敗戦によって精神的にも物理的にもすべてを失ったドイツの前線世代の若者たちにおいてこそ、喪失感はいっそう深刻かつ悲痛な形で現出していたのである。

３年にわたる研究期間の成果として、比較ナショナリズム研究会において、「前線世代のナショナリズム――ワイマール期ドイツを事例にして――」(2006 年２月 18 日(土)、同志社大学）と「戦間期ドイツのナショナリズム―前線世代を中心に―」（2008 年 10 月 26 日（日)、同志社大学）の二度にわたって報告を行った。研究会では、活発な質疑や討論が行われ、その内容を踏まえて、報告原稿に加筆と修正を加える形で論文を執筆した。その結果として、「両大戦間期ドイツのナショナリズム――前線世代を中心に――」という論文を完成させた。本論稿は、今年度のできるだけ早い時期に、学術雑誌『比較文化研究』に投稿する予定である。(竹島)

(6) 「近代日本のナショナリズムと伝統文化」というテーマのもとに研究を進めた。

津田左右吉は「愛国心」のなかに、共通の伝統的な文化を尊重する国民としての「愛国心」と、主体的に自分たちが国家を形成していこうとする「愛国心」の二種類のものを見出している。戦時中の「愛国心」は後者の主体的な要素が希薄であり、そのために誤った政策を行っても国民は止めることができなかったのである。戦後も「愛国心」が重要であると津田は考えており、なかでも国民が日本を自分たちで形成するという意識を育成していくことが肝要であった。これは、換言すれば、「ネーションの同質性」と「政治的シティズンシップ」の問題であるといえよう。「何らかの意味での同質性をもつと想定される人々の群れ」としてのネーションに注目すると、言語・歴史・伝統文化―それが作られたものであれ、継承されてきたものであれ―といった共有しうるナショナル・アイデンティティが重要になってくるだろう。「政治的シティズンシップ」に注目するならば、必ずしも同質的なアイデンティティを成員に求める必要はない(杉田「憲法とナショナリズム」『岩波講座　憲法 3』岩波書店、2007 年)。アイデンティティも多種多様であり、重層的な帰属意識を有する人々が共生しうる可能性も存在していた。よって戦後の「新かなづかい」論争に焦点を当て、この二つの「愛国心」の相克を分析した。

そこから浮かび上がってきた戦後のナショナリズムにおいては、いかにして同質的なナショナル・アイデンティティを構築していくのかという問題と、多種多様な人々が自らの手で日本を構成するという政治的な主体性の問題とが錯綜しており、両者のズレは認識されていなかった。このナショナル・アイデンティティと国民の主体性の問題は、いまなお、日本思想史の領域で考察していかなければならない課題であろう。(長妻)

(7) 本研究における役割分担は、「アメリカにおける反移民主義とナショナリズム」である。科研費受給中は、国民国家における「他者」表象の問題としての反移民主義を検討し、特にアメリカ合衆国における事例を検討しようと試みてきた。

今回、私が特に着目したのは、いわゆる同化をめぐる言説の問題である。「同化（assimilation)」とは、みずからが移り住んだ社会やコミュニティへと、移民やその子孫たちが溶け込んでいく現象や、その過程を指す。ただしこうした意味での同化は、価値中立的な用語ではなく、しばしば否定的な含意を伴っている。例えば「人種の坩堝」という古典的な比喩は、多様な移民からなる諸々の文化集団に対して、アメリカ人という単一の範型を強制する同化イデオロギーの発露で

あると、しばしば解釈されてきた。つまり同化とはマイノリティに対する、マジョリティの文化や生活様式の強制であり、ゆえに反多文化主義的な悪行として捉えられるのが、現代アメリカにおける一般の趨勢である。

しかし移民に同化を要求することなく、彼らとともに一つの市民社会や国家を形成することが、はたして実際に可能なのか。また同化とはそもそも、糾弾に値するほど抑圧的な本質を有するものなのか――こうした問題をめぐり、私が考察の主要な対象としたのが、反移民主義陣営からの同化擁護論であった。現代の大量移民はアメリカの同化力を超えており、よって移民の数的制限をおこなうべきというのが、反移民主義側の主張の骨子である。彼らの移民制限論への評価は措くとしても、同化を様々に肯定するその言論からは、学ぶべきことが多々あるように思われる。

上記の研究方針に基づき、今後も反移民主義の検討を続けていくつもりであるが、現在はとりあえず中間報告として、論文を１本まとめつつある。本論文が完成の暁には、所属大学の紀要あるいは所属学会のジャーナルに、投稿の予定である。(伊藤)

(8)　今日でもしばしば日本の独自性を強調するさいに使われる国粋という言葉は、1888 年に結成された思想集団政教社の雑誌『日本人』誌上で、英語ナショナリティの訳語として使われた明治の新語である。従来、単なる外国嫌いの排外思想ではなく、ナショナリティをキー概念としたヨーロッパ流の近代ナショナリズム運動であった政教社の研究は、その成立事情も含めた書誌的研究や、三宅雪嶺といった人物などの個別研究はあるにせよ、その全体像に対する研究はきわめて脆弱である。その全体像を明らかにするためにも、結成当初からその底流にうず巻いていたナショナリティ観念をめぐる問題を手掛りに、政教社の原風景を先入観なく再現してみようというのが研究の目的であった。

その結果明らかになったことは、国粋という言葉を造語したと考えられる志賀重昂の「美術的の観念」という定義は、当然のように天皇をナショナル・アイデンティティの核心と考えていた大半の同人との軋轢を生み、にもかかわらず、この点が深く問われることがないまま、同人内の異端の人物であった志賀を中心に、わずか数年で解体の危機に瀕した政教社の再組織化が図られていったということである。

今一つ展望も含めていうなら、志賀の文化的、地理的ナショナリティは本来、非政治的で平和志向を内包するものであったが、現実には、国民を対外進出と戦争に駆りたてていく銃後のナショナリティに成り果てたのではないかという課題が残されている。柳田国男の「民俗学」的アイデンティティ探求や和辻哲郎のヨーロッパ最新学問の意匠を凝らした『風土論』はいうまでもなく、第二次大戦後の「天皇」なきナショナル・アイデンティティを探求しようとするさまざまなレベルの日本人論、日本文化論は志賀的ナショナリティの発想の系譜に属するものであることをふまえれば、より深く研究する必要があると思われる。(宮崎)

(9)　移民社会フランスを中心として、多文化時代におけるナショナリティの変容について理論的側面から検討を加えた。その成果の一端として、多文化主義の理論家として知られるチャールズ・テイラーやウィル・キムリッカの議論を取り上げた「多文化主義」(岡崎・木村編『はじめて学ぶ政治学』ミネルヴァ書房、2008 年）がある。また、多文化主義の実践を支える理論的支柱のひとつに、文化の価値に優劣を認めない「文化相対主義」の思想があるが、この一見するとリベラルな立場がある種のレイシズムと通底するという現代のアポリアにも注意を促した。すなわち文化相対主義は、文化の差異を保存するという口実のもとに文化相互の接触を忌避し、移民の排除を要求する「新しいレイシズム」に対して、有効な批判を展開できないのである。この点に関しては、「レヴィ＝ストロースとゴビノー――レイシズムをめぐって」（『思想』1016 号、2008 年）において、文化相対主義の人類学者レヴィ＝ストロースと、ナチスの人種政策に影響を与えたと言われるアルチュール・ド・ゴビノーの思想が、期せずして同型のロジックをそなえていることを論じた。(長谷川)

(10)　近代日本の右翼運動と中国ナショナリズムの関係性について分析するにあたり、近代日本の右翼思想家の代表的存在とされる北一輝と中国革命のかかわりについて検討するとともに、北とも交流が深かった革命派の宋教仁、及び立憲派の楊度の思想について考察した。両者はいずれも中国における議会制民主主義の導入を図ったが、その目的はあくまで中国の強国化であり、なおかつ中国の諸民族を統合することにあった。後者の目的を実現するため、楊度は中国の領域内に居住する主要な五民族の統合を図る「五族統一」論を説き、宋はその影響のもとに「五族共和」論を展開したのである。

しかし、両者とも中国の多数派である漢族の優越性を確信しており、少数民族の自主性を顧慮する視点は存在しなかった。これらの議論は、今後の中国における「民主化」と「民族問題」の関係を考える上で示唆を与えるものである。さらにいえば、北一輝が積極的に宋教仁を支援し、その「五族共和」論に賛意

を示していたという事実も、日本の右翼運動と中国ナショナリズムの関係性を見るうえで見逃せない点である。今後は、さらに他の右翼思想家の中国論にも目を向けつつ、考察を進めていくことにしたい。(萩原)

(11) 19 世紀ドイツのナショナリズム思想の特徴とその問題点を、「ドイツ国民」形成という側面から考察した。この時期、国家統一の遅れから、国民像を理念のうえで作り上げざるをえなかったドイツの知識人たちは、新人文主義のパースペクティヴのもと、ドイツ国民をギリシアの精神的後継者とみなす国民像をつくり上げていった。ところが、かかる理想主義的な国民像は、普遍主義を志向するその世界市民的な性格の背後にドイツのフランスに対する優位を主張しようとしていたという点で排他的な要素を多分に含んでおり、のちに人種主義のような偏狭な思想とも通底する性格をももっていた。とするならば、欧州統合の流れを受けて、最近になって脚光を浴びつつあるかかる国民像もまた、批判的な再検討を経たうえで継承されるのでなければならないというべきであろう。

これからのあるべき「国民」の姿について検討するに際して、この時期の「ドイツ国民」をめぐる議論がわれわれに与えている示唆は、以上のような意味において、決して少なくないようにおもわれることが、研究の成果として明らかとなった。(馬原)

(12) 先の「研究の目的」にも触れたように、グローバル化の進展のなかで国民国家やナショナリズムは重要性を失っていくという見方に対して、むしろそれらの「変容」が現代を特徴づけているという視点を設定した上で、リベラリズムとナショナリズムの共生と統合という問題を再考すべく、ミラー、バーリン、コーンなどの議論をふまえつつ研究を進めた。比較ナショナリズム研究会においては、ミラー、バーリン、コーンなどの議論に着目しつつ、「ナショナリティの政治学について――リベラル・ナショナリズムの問題圏」(2006 年 10 月 7 日)、「ナショナリズム研究の視角について」(2007 年 5 月 19 日)という題目のもとに報告した。

このテーマに関連する最近の研究成果として、「グローバル時代のナショナリティ」(富沢・力久編著『グローバル時代の法と政治――世界・国家・地方』、成文堂、2009 年)及び「ナショナリズム」(古賀敬太編『政治思想の概念史』第 3 巻、晃洋書房、2009 年刊行予定)などがある。(富沢)

以上の各研究分担者の成果をもとに、今後は内外の研究状況をふまえ、あらためて「リベラル・ナショナリズムの再検討――国際比較の観点から」と題する研究書としてまとめたいと考えている。(富沢)

５．主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計６件)

(1) 長谷川一年「レヴィ＝ストロースとゴビノー――レイシズムをめぐって」、『思想』、査読無、第 1016 号、2008 年、18－22 頁

(2) 竹島博之「グローバル化時代のアイデンティティとシティズンシップ教育」、『政治研究』(九州大学政治研究会)、査読無、第 55 号、2008 年、41－61 頁

(3) 萩原稔「『民族革命』から『五族共和』へ――北一輝の中国革命観についての一考察」、『同志社法学』、査読無、第 321 号、2007 年、515－542 頁

(4) 伊藤豊「イギリスにおけるホモセクシュアリティ合法化の問題――『ウォルフェンデン報告書』を読む」、『同志社法学』、査読無、第 321 号、2007 年、195－220 頁

(5) 長妻三佐雄「有機体的共同性に関する一考察」、『同志社大学ヒューマン・セキュリティ研究センター年報』、査読有、2007 年、146-161 頁

(6) 馬原潤二「エルンスト・カッシーラーのマキャヴェリ論――『シンボル形式』の哲学の政治思想的『到達点』」、『同志社法学』、査読無、2006 年、151－218 頁

〔学会発表〕(計２件)

(1) 施光恒「リベラル・ナショナリズム論や多文化主義論からの検討――多様な形態のリベラル・デモクラシーという理想――」、日本法哲学会、2008 年 11 月 22 日、学習院大学

(2) 植村和秀「二十世紀思想史としての昭和思想史」、日本思想史学会、2008 年 10 月 18 日、愛知教育大学

〔図書〕(計４件)

(1) 富沢克・力久昌幸編著、成文堂、『グローバル時代の法と政治――世界・国家・地方』、2009 年、197－217 頁(全 217 頁)

(2)　施光恒・黒宮一太編、ナカニシヤ出版、『ナショナリズムの政治学――規範理論への誘い』、2009 年、66－86 頁（全 200 頁）

(3)　出原政雄編、法律文化社、『歴史・思想からみた現代政治』、2008 年、35－61 頁（全 236 頁）

(4)　植村和秀、柏書房、『「日本」への問いをめぐる闘争――京都学派と原理日本社』、2007 年、297 頁

６．研究組織

(1)研究代表者

富沢　克
　同志社大学・法学部・教授
　６０１２１５９７

(2)研究分担者

出原　政雄
　同志社大学・法学部・教授
　３０３６７９６６

城　達也
　大阪経済大学・人間科学部・教授
　７０２７１６０８

植村　和秀
　京都産業大学・法学部・教授
　１０２４７７７８

施　光恒
　九州大学・比較社会文化研究院・准教授
　７０３７２７５３

竹島　博之
　福岡教育大学・教育学部・准教授
　９０３４６７３４

(3)連携研究者

長妻　三佐雄
　大阪商業大学・総合経営学部・准教授
　８０３９９０４７

伊藤　豊
　山形大学・人文学部・准教授
　４０３４４７７５

宮崎　晶行
　同志社大学・法学部・嘱託講師
　９０３９９０４８

長谷川　一年
　同志社大学・法学部・助教
　００３９９０４９

萩原　稔
　同志社大学・法学部・嘱託講師
　３０３９９０５０

馬原　潤二
　同志社大学・法学部・嘱託講師
　４０３９９０５１